短報

「薏苡仁の治療処方」追補

小山 誠次

‘Kampo Formulas Containing Coicis Semen
that are Effective in the Treatment
of Verrucae’ Supplement

Seiji KOYAMA

M. D., Fushimi Clinic, 3-318 Ginza-cho, Fushimi-ku, Kyoto City 612, Japan

Abstract A report by the author entitled “Kampo formulas containing Coicis Semen that are Effective in the Treatment of Verrucae” was published in Volume 47 Number 1 of the Japanese Journal of Oriental Medicine. In this paper, the author notes the finding of a reference that supplements the above report. In ‘Yojuin Yamawaki Sensei Hokan,’ written by Yamawaki Toyo the author found the following: “To control verrucae, boil 5 sen of Coicis Semen in 3 go of water. Drink or wash the affected area with 1 go of this use.” (This text was originally written in classical Chinese.) It is clear from this statement that Yamawaki Toyo used Coicis Semen for verrucae in a manner resembling folk medicine. Although the date of compilation of the text is not known, this treatment method had obviously been in use before the death of Yamawaki Toyo (1762).

The description of the use containing Coicis Semen appearing in the above text is more accurate than that found in ‘Yamato Honzo.’

The first description of a formula for Coicis Semen for the treatment of verrucae is found in ‘Meika Hosen,’ which was edited by Yamada Genrin in his late teens after stealing formulas from various famous doctors. According to various medical texts, the name of Yamada Genrin was Ikkyo. In ‘Meika Hosen,’ which Yamada edited, his name was written using different Chinese characters, but also pronounced ‘Ikkyo,’ this was probably his original first name. The name ‘Ikkyo’ with the characters used later is associated with the text ‘Baiso Yakugen.’

Key words: Coicis Semen, verrucae, folk medicine, Yamawaki Toyo, Yamada Genrin Ikkyo.

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), 48, 49-52, 1997

(Accepted: Nov. 7, 1996)

緒言

『日本東洋医学雑誌』第47巻第1号に筆者の論文「薏苡仁の治療処方」¹⁾が掲載された。筆者の投稿論文の最終稿が編集委員会によってアクセプトさ

れて後、「薏苡仁の治療処方」の内容を追補する文献を見出したので、今回短報にて報告する次第である。従って、本論文は「薏苡仁の治療処方」をまた別の面より追加補充する内容である。

医、伏見診療所、京都、〒612 京都市伏見区銀座町3-318

〔1996年11月7日受理〕

本 論

I. 『養寿院山脇先生方函』

山田元倫撰『名家方選』は安永九年(1780)の序文があり、天明元年(1781)の刊行であることは、既に「薏苡仁の治疣処方」において述べたことである。

今回、平出延基編『普救堂叢書』に収録されている山脇東洋著『養寿院山脇先生方函』に、「理疣方 薏苡仁五錢 右一味以水三合煮取一合或服或洗(筆者訓読：疣ヲ理スル方 薏苡仁五錢 右一味、水三合ヲ以テ煮テ一合ヲ取り、或ハ服シ、或ハ洗フ。)」²⁾との記事を見出した。

この記事は山脇東洋が疣を治療するにあたり、薏苡仁が有効であることを、恐らく既に民間の風評として聞き及んでいたことから実際に煎服あるいは洗滌によって確認したため記録したものと思われる。これは民間薬的に薏苡仁が治疣的に奏効するとした点で、「薏苡仁の治疣処方」で検討した『大和本草』の「面ニ小瘡出テ恰如癩」よりも遥かに確実な内容である。山脇東洋の実証主義的精神がここにも表われているとみることができよう。

なぜならば、「薏苡仁の治疣処方」においても、「特に薏苡飯や薏苡粥では大量に薏苡仁を摂取することになるので、疣贅に罹患した人が摂食すれば著効例を多々経験したはずである。これらの貴重な経験を累積し、『名家方選』の治疣方となったのであろう」と述べているが、実際の経緯としては、上記の著効例を多々経験した後、まず民間薬的に疣の治療術として知られる所となり、次いで専門の治療家の注目する所となって、その後に最適の処方として取捨選択して確立され、処方書に収載されるに及ぶはずだからである。

即ち、『名家方選』の「治疣方」として収載されたのは最後の段階であり、今回筆者の調査した『養寿院山脇先生方函』への収載は、専門の治療家とその民間薬に注目して採用した段階である。

一般に専門家が民間の治療術を採用することには多少抵抗感を抱きうることもあるが、山脇東洋はその他の民間薬に対しても探究心が深かったことは、宗田一の『啓迪』第13号の記念文集「山脇

一門と鳥羽の姫薬」³⁾にも表われている。

さて、『普救堂叢書』自体の編年は嘉永元年—七年(1846—1854)である。しかしながら、実際の『養寿院山脇先生方函』の成立年が何時であるかは全く不明であるが、実際の投薬年代は少なくとも山脇東洋の没年である宝暦十二年(1762)より以前であることは論を俟たない。

一方、刊本である山脇東洋著『養寿院方函』(万笈堂英平吉刊、文化十三年)には、薏苡仁の治疣作用の記載は全く見られない。

以上によって、『名家方選』に至る以前には民間薬的な疣の治療術として注目された時期があったはずであり、今回調査した『養寿院山脇先生方函』はこの段階に相当すると思われる。

II. 山田元倫＝浅井南阜

『名家方選』凡例⁴⁾には、「名家方選者纂集名家之良方有経験者也薬物多少随古伝不加私意然有別考則書其説於後也(筆者訓読：名家方選ハ名家之良方ノ経験有ル者ヲ纂集スル也。薬物ノ多少ハ古伝ニ随ヒテ私意ヲ加ヘズ。然ルニ別ニ考フルコト有ルトキハ其説ヲ後ニ書スル也。)」とあって、同書は山田元倫が当時の諸家の諸名方を収録した書であるから、ここに云うように山田元倫自身の創方ではなく、他にオリジナルな処方の創製者がいることを表明している。しかし、当時の常習としてそれほどの名方であるならば、その創製者自身あるいはその一派の門人が文書の上で記録することは必ずしも是とはされず、むしろ口伝で門外不出としていた処方も多いはずである。

実際、どのようにして山田元倫が諸家の諸名方を入手し、あれだけまとめて収録することができたかはまた別の意味で興味深いところである。もちろん、タダでは教えてもらえなかったであろうことは容易に想像しえるが、先の凡例文中には纂集という表現が用いられているから、どうも秘かに盗掠して纂集した意味合いが強い。

さて、安西安周は『漢方と漢薬』第十巻第十一号の「名家灸選大成と平井庸信」⁵⁾の中で、「……名家方選の著者山田元倫とは浅井南阜と同一人であって、山田元倫は南阜の前身である。」と述べているので、山田元倫＝浅井南阜であることが判

然とするのである。

また、矢数道明も『漢方の臨床』第22巻第10号の「温知莊雑筆(11)・浅井惟亨(号南阜)について」⁶⁾の中で、「浅井惟亨も、和氣惟亨と称し、また天明元年(1781)名家方選を著し、寛政十二年(1800)梅瘡約言を著わし、……」と述べ、更には「逆算すれば惟亨は宝暦十年(1760)に京都で生れた訳である。」とも述べているので、『名家方選』は山田元倫惟亨20歳のときに序文を書き、21歳のときに刊行した書ということになる。

そうすると10歳代後半から秘かに盗掠して纂集したことになり、相当に盗掠する術に長けていたということができらるだろう。

一方、山田元倫惟亨の名であるが、『名家方選』自叙⁷⁾には「山田元倫惟亨撰」とあり、凡例⁴⁾には「南阜誌」とあって、更に享和二年刊の『黴瘡約言』巻頭⁸⁾には「和氣惟亨著」と記載されていることを鑑みれば、浅井南阜の名は始めは維亨で、後に惟亨と改名したものかもしれない。

考 按

『養寿院山脇先生方函』の引用記事の中で、「理脱方」は実際に筆者が見た文献上は「理虬方」と記述されている。

これについて同書跋⁹⁾には、「右山脇東洋先生方函以京師大橋氏藏本写畢魯魚馬焉之誤不少然不改一字訛依旧得他本待校考爾云于時嘉永六癸丑冬十一月十一日筆止於醉古書屋南軒暖処 中村簡伯敬(筆者訓読: 右ノ山脇東洋先生方函ハ京師ノ大橋氏ノ藏本ヲ以テ写シ畢ハル。魯魚馬焉ノ誤リ少ナカラズ。然レドモ一字ヲモ改メズ。訛リハ旧ニ依リテ得。他本ノ校考ヲ待ツノミト云フ。時ニ嘉永六癸丑冬十一月十一日筆止ム。醉古書屋南軒ノ暖処ニ於テ。 中村簡伯敬ミテ)」とあるので、恐らく大橋氏の蔵本において既に「理虬方」となっていたものであろう。

薏苡仁の効能としては、「薏苡仁の治疣処方」でも引用した『本草綱目』にも、「……殺虬

蟲。……」の文字が見えるので、これから判断すれば、「理脱方」であっても訝しくはないが、「理虬方」の後の「或服或洗」を考按すれば、やはり「理脱方」でなければならない。今これを改める。

結 論

1. 民間薬的には山脇東洋は疣の治療に既に薏苡仁を使用していた。

2. 『名家方選』は山田元倫が10歳代後半から秘かに諸家の諸名方を盗掠し、纂集した書である。

3. 山田元倫の名は天明元年には維亨とあり、21年後の享和二年には惟亨と誌されているから、『名家方選』以後に改名されたものかもしれない。

謝辞 『養寿院山脇先生方函』／『普救堂叢書』及び『養寿院方函』は武田科学振興財団杏雨書屋の所蔵です。いつもながらの閲覧に對しまして深謝致します。

また、審査員より矢数先生の『漢方の臨床』第22巻第10号の「温知莊雑筆(11)・浅井惟亨(号南阜)について」⁹⁾を参照するようにとの御指摘を受けました。感謝申し上げます。

文 献

- 1) 小山誠次: 薏苡仁の治疣処方, 日本東洋医学雑誌, 47, 63-69 (1996)
- 2) 山脇東洋著, 平出延基編: 養寿院山脇先生方函(写)／普救堂叢書, 嘉永六年
- 3) 宗田一: 山脇一門と鳥羽の姫薬, 啓迪, No. 13, pp.31-33, 京都医学史研究会 (1995)
- 4) 山田元倫撰: 名家方選, 凡例, 浅井莊右衛門他, 天明元年
- 5) 安西安周: 名家方選大成と平井庸信, 漢方と漢薬, 第十巻, 第十一号, 790-791 (1943)
- 6) 矢数道明: 温知莊雑筆(11)・浅井惟亨(号南阜)について, 漢方の臨床, 第22巻, 第10号, 592-593, 1975
- 7) 山田元倫撰: 名家方選, 自叙, 浅井莊右衛門他, 天明元年
- 8) 和氣惟亨著: 黴瘡約言, 巻之上, 一丁表, 観宜堂蔵板, 享和二年
- 9) 山脇東洋著, 平出延基編: 養寿院山脇先生方函(写)／普救堂叢書, 跋, 嘉永六年

要旨 『日本東洋医学雑誌』第47巻第1号に筆者の論文「薏苡仁の治疣処方」が掲載された。今回、その論文の内容を追補しうる文献を見出したので報告する。山脇東洋著『養寿院山脇先

生方函』には、「朮ヲ理スル方 薏苡仁五錢 右一味、水三合ヲ以テ煮テ一合ヲ取り、或ハ服シ、或ハ洗フ。(原文漢文)」とあり、山脇東洋が薏苡仁を民間薬的に疣の治療として使用していたことが明白である。本書の成立年は全く不明であるが、治療年代は山脇東洋の没年（宝暦十二年）より以前であることは論を俟たない。この記事は『大和本草』中の薏苡仁の治療記事より遥かに確実である。また、薏苡仁の治療処方をもっとも最初に記載した『名家方選』は、山田元倫が10歳代後半から秘かに諸家の諸名方を盗掠し、纂集した書であり、山田元倫の名は諸文献によれば惟亨となっているが、『名家方選』自叙には維亨とあり、『黴瘡約言』には惟亨とあるので、始めは維亨だったかもしれない。

キーワード：薏苡仁，疣，民間薬，山脇東洋，山田元倫維亨